

弓道中祖伝

国枝史郎

青空文庫

1

「宿をお求めではござらぬかな、もし宿をお求めなら、よい宿をお世話せわいたしましょう」

こう云つて声をかけたのは、六十歳ぐらいの老人で、眼の鋭い唇の薄い、頬のこけた顔を持っていた。それでいて不思議に品位があつた。

「さよう宿を求めて居ります。よい宿がござらばお世話下され」
こう云つて足を止めたのは、三十二三の若い武士で、旅装いに身をかためていた。くくり袴、武者草鞋わらじ、右の肩から左の脇へ、包を斜ななめに背負しょつていた。手には鉄扇をたずさえている。深く編笠

をかむっているのです、その容貌は解わからなかつたが、体に品もあれば威もあつた。武術か兵法かそういうものを、諸国を巡つて達人に従つき、極めようとしている遊歴武士、——といったような姿であつた。

「よろしいそれではお世話しましょう。ここは京の室町むろまちで、これを南へ執とつて行けば、今出川いまでの通りへ出る。そこを今度は東へ参る。すると北小路ここうじの通りへ出る。それを出はずれると管領かんりょうヶ原で、その原の一所に館たねがござる。その館へ参つてお泊りなされ。和田の翁うけたまより承うけたまわつたと、このように申せば喜んで泊めよう。さあさあおいで、行つてお泊り」

云いすてると老人は腰を延ばし、突ついていた寒竹かんちくの鞭むちのよう

な杖を、振るようにして歩み去った。

若い武士は唾然としたようであつた。

時は文明^{ぶんめい}五年であり、応仁の大乱が始まつて以来、七年を経た時であり、京都の町々は兵火にかかり、その大半は烏有^{うゆう}に歸し、残つた家々も大破し、没落し、旅舎というようなものもなく、有つてもみすばらしいものであつた。若武士が京の町へ足を入れたのは、たつた今しがたのことであり、時刻はすでに夕暮であり、事実さつきからよい宿はないかと、それとなく探していたところであつた。で、老人に呼び止められ、今のように宿を世話されたことは、有難いことには相違なかつたが、それにしても老人の世話のしかたが、あまりにも唐突であつたので、そこで唾然とした

のであった。唾然としたが、それがために、老人の好意を無にし
たり、老人の言葉を疑うような、そんな卑屈な量見を、その若武
士は持っていないと見えて、云われたままの道を辿り、云われた
ままの館の前に立った。

さてここは館の前である。

もうこの時は初夜であつて、遅い月はまだ出ていなかった。

で、細かい館の様子は、ほとんど見ることが出来なかつたが、
ひはだぶき 桧皮葺の門は傾き、門内に植えられた樹木の枝葉が、森のよう
に繁っていた。取り廻された築地つじじも崩れ、犬など自由に出入り出
来そうであつた。旅宿といったような造りではなかつた。

(これは変だな) と思つたものの、そのことがかえつて若い武士

の、好奇の心をそそつたらしく、立ち去らせる代わりに門を叩かせた。

と、叩いた手に連れて、門が自ずと少し開いた。

(不用心のことだ) と思いながら、若武士は門内へ入つて行つた。鬱々と繁っている庭木の奥に、いかめしい書院造りの館が立つていた。桁行^{けたゆき}二十間、梁間^{はりま}十五間、切妻造り、柿^{こけらぶき}茸の、格に嵌まった堂々たる館で、まさしく貴族の住居であるべく、誰の眼にも見て取れた。しかし凄じいまでに荒れていて、階段まで雑草が延びていた。

森閑^{しんかん}として人気もない。勿論燈^{ともしび}火も洩れて来ない。何となく

鬼気さえ催すのであった。しかし応仁の大乱は、京都の市街を戦

場とした、市街戦であつたので、この種の荒れ果てた館などは、どこへ行つても数多くあり、珍しいものではなかつたので、若武士は躊躇しなかつた。

「ご免下され、お取次頼む」

こう高声で呼よばわつた。が、返辞は来なかつた。そこで若武士はさらに呼んだ。三度四度呼んで見た。が、依然として返辞はなかつた。

「やれやれ」と若武士はつぶや呟いた。

「これはどうやら無住の館らしい。とするとどうしてあの老人は、こんな所を世話したのであろう？」

これからどうしようかと考えた。足も疲労つかれていたし気も疲労て

いた。で、無住の館なら、誰にも遠慮することもない。ともかくもしばらく休息して行こう。こう考えて玄関を上った。二ノ間一ノ間を打ち通り、奥の間へ来て佇んだ。燈火のない屋内は、ひたすらに暗く何も見えなかつた。

そこで若武士は膝を揃えて坐った。疲労た足を癒すには、端坐するのがよいからであつた。

2

こうしてしばらく時が経つた。と、その時裏庭の方から、清らかな若い女の声で、今様めいた歌をうたう、歌の声が聞こえてきた。

(はてな?)と若武士は耳を澄ました。

荒れし都の古館、見れば昔ぞ忍ばるる、蓬よもぎが原に露しげく、啼うずらくは鶉か憐れなり

それはこういう歌であった。若武士は当然意外に感じた。

(このような荒れ果てた館の庭で、歌をうたう女があるうとは? さては無住ではなかったのか?)

で若武士は立ち上り、部屋を出て縁へ立った。星明りの下に見えたのは、荒れた館にふさわしく、これも荒れ果てた裏庭で、雑草は延びて丈じょうにも達し、庭木は形もしどろに繁つて、自然の姿を呈して居り、昔は数奇を谷きわめたらしい、築山、泉水、石橋、亭、そういうものは布置においてこそ、造庭術の蘊うん奥おうを谷めて、在

る所に蔽として存在していたが、しかしいずれも壊れ損じ、いたましい態ざまを見せていた。

と、白衣びやくえの丈の高い女が、水のない泉水の岸のほとりを、築山の方へ歩いていった。

（あれだな）と若武士は突嗟に思い、少しはしたなくは思ったが、そこに穿物はきものがなかったので、跣足はだしのまま庭へ下り、驚かせた。ら逃げるかもしれない、こう何となく思われたので、物の陰から物の陰を伝い、女の方へ近寄って行った。しかし泉水の岸のほとりまで、その若武士が行った時には、女の姿は見えなかった。

（築山つぎやまの向こうへでも行ったのであろうか）と違って若武士は先へ進んだ。

と、突然老人の声が、築山の方から聞こえてきた。

「参るぞーッ」という声であつた。

途端に烈しい弦つるおと音がした。

「うん！」

気合だ！ 気合をかけて、若武士は持っていた鉄扇で、空をパツと一揮した。足あしもと下に落ちたものがある。平いたつき題の箭やであつた。「お見事！」と女の声が聞こえた。築山の方から聞こえたのである。

と、又老人の声がした。

「もう一ひとすじ條参る、受けて見られい」

ふたたび烈しい弦音がした。

「うん」と全く同じ気合だ。気合をかけて若武士は、またも鉄扇を一揮した。連れて箭が足下へ叩き落とされた。

「お見事」と又も女の声がし、すぐに続いて問いかけた。

「弓きゆう箭ぜんの根元ねもとご存知でござるか？」

「弓箭の根元は神代にござる」

言下に若武士はそう答えた。

「根ねの国くにに赴おもむきたまわんとして素す盞さん鳴なり尊みこと、まず天あま照てらす大おお

神かみに、お別れ告つげんと高たか天あま原はらに参まゐる。大神おおかみ、尊みことを疑うわせられ、

千入ちいりの鞆うづほを負おい、五百入いおひりの鞆うづほを附つけ、また臂うでに伊都いつ之の竹たか鞆ともを取り

佩はき、弓の腹はらを握にぎり、振り立て振り立て立ち出で給たまうと、古事記

に謹記きんぎまかりある。これ弓箭の根元ねもとでござる」

「さらに問い申す重籐しげとうの弓は？」

「誓つて将帥の用うべき品」

「うむ、しからは塗籠籐ぬりごめとうは？」

「すなわち士卒の使う物」

「蒔絵弓まきえは？」

「儀仗ぎじょうに用い」

「白木糸裏は？」

「軍陣に使用す」

「天晴あつぱれ！」と女の清らかな声が、築山の方からまた聞こえてき

た。

「お若いわがに似合わず技巧わざばかりでなく、学にも通じて居られます

「ご様子、姓名をお聞かせ下されよ」

「伊賀の国の住人日置正次、へきまさつぐ弓道の奥義極めようものと、諸国遍歴いたし居るもの。……ご息女のお名前お聞かせ下され」

すると代わって老人の声が、遮るように聞こえてきた。

「あいや、ご無用、まだ早うござる。……なるほど防身うけみは確かでござる。が果たして射術の方は？ ……両様の態たい定つた暁、何も彼もお明しなさるがよろしい」

ここでにわかに手を拍つ音が、田楽の節を帯びて聞こえてきた。

「天王寺てんおうじの妖霊星ようれいほし！ 天王寺の妖霊星！」

「見たか見たか妖霊星！」

女がそれに合わせて歌った。これも同じく手を拍っている。

「千早ちはやは落ちたか、あら悲しや」

「悲しや落ちた、情なや」

「天王寺の妖霊星！」

「妖霊星、妖霊星！」

足拍子の音が聞こえてきた。

しかし次第に遠退いた。踊りながら築山の奥の方へ、二人揃って行ったようであった。

3

書院へ帰って来た日置正次は、あつとばかりに驚かされた。蒔絵の燭台に燈火がともし、食机おしきの上に盆鉢わんぱちが並び、そこに馳走

の数々が盛られ、首長の瓶子へいしには酒が充たされ、大盞さかづきが添えられてあり、それらの前に刺繡を施した茵しとねが、重々あつあつと敷かれてあつたからである。

「ほう」と正次は声を洩らした。

「これは一体どうしたことだ？」

しかし直ぐに感づいた。

(さっきの女によしよう性と老人とが、この館に住む人々で、その人々

がこの身に対し、心尽くしをしたのであろう)

「忝かたじけのうござる、頂戴つかまつ仕る」

どこにも人影は見えなかったが、いずれどこかでこつちの進退を、仔細に観察しているだろうと、こんなように考えられたとこ

ろから、こうつつましく礼を云い、それから瓶子を取り上げて、酒を注ぎ盞を取った。で、悠々と酒を飲み、数々の料理に箸をつけた。その間も館内は寂然としていて、全く人の氣勢けはいはなく、人家に離れているところから、他に物音も聞こえなかつた。充分に腹を養つたため、とみに正次は精氣づき、心ものびのびと展ひろがつて来た。で、のんびりと部屋を見廻した。

「ほう」とまとも正次は、思わず声を洩らしてしまった。

見れば背後うしろの床ノ間に、倍のぶさね実筆の山水の軸が、大きくいっばいに掛けられてあり、脇床の棚の上には帙ちつに入れられた、数巻の書が置かれてあり、万事正式の布置であつて、驚くことはなかつたが、ただ一つだけ床ノ間に、陰陽二張の大弓と、二十四條の箭や

を納めたところの、調度掛が置いてあったことが、正次の眼を驚かせた。しかも定紋は菊水きくすいであった。

「ム——」と何がなしに正次は唸つて、調度掛の前へいざり寄つた。

その同じ夜のことであつた。異装の武士の大衆が、京の町を小走つていた。人数は三十五人もあつたが、いずれも一様に裸体であり、髪は散らして太い縄で、結び目を額に鉢巻し、同じく荒縄を腰に纏い、それへ赤鞆あかさやの刀を差し、脚には黒の脛巾はばきを穿き、しかも足は跣足はだしであつた。が、その中には脛すねへばかり、脛当こてをあてた者があり、又腕へばかり鉄と鎖の、籠手こてを嵌めたものがあり、

そうかと思うと腰へばかり、草摺くさずりを纏った者があつた。手に手に持つてゐる獲物といえ、鉞まさかり、斧ながえ、長柄、弓、熊手、槍、棒などであつた。先へ立つた数人が松明たいまつを持ち、中央にいる二人の小男が、蛇味線じゃみせんを撥ぼちで弾いていた。

頭領と見える四十五六の男は、さすがに黒革の鎧を着、鹿角かづのを打つた冑かぶとを冠り、槍を小脇にかい込んでいた。

この一党は何物なのであろう？　いわば野武士と浪人者と、南朝の遺臣の団体あつまりなのであつた。応仁の大乱はじまつて以来、近畿地方は云う迄もなく、諸国の大名小名の間、栄枯盛衰が行なわれ、国を失つた者、城を奪われた者が、枚挙に暇ないほど輩出した。その結果縁に離れた者が夥おびただしいまでに現われた。すなわち

野武士浪人が、日本の国中に充ちたのである。それ以前から足利幕府に、伝統的に反抗し、機会さえあつたら足利幕府に、一泡吹かせようと潜行的に、策動している南朝方の、多くの武士が諸方にあつた。すなわち新田にったの残党や、又、北きた畠たけの残党や、楠氏なんしの残党その者達である。で、そういう武士達は、時勢がだんだん逼塞し、生活苦が蔓延するに従い、個人で単独に行動していたのでは、強請ごうせい、押借おしがりというようなことが、思うように効果があがらなくなつたのと、いうところの下剋上げこくじょう——下級したの者すなわち貧民達が、上流うえの者を凌ぎ侵しても、昔のようには非難されず、かえつて正当と見られるような、そういう時勢となつたので、そこで多数が団結し、何々党、何々組などと、そういう党名や組名

をつけて、搢紳しんしんの館や富豪の屋敷へ、押借りや強請に出かけて行くことを、生活の方便とするようになった。

ここへ行く一団もそれであつて、「あばら組」という組であり、頭目は自分で南朝の遺臣、しかも楠氏の一族の、恩地左近おんじさこんの後続である、恩地雉四郎であると称していたが、その点ばかりは疑わしかったが、剽悍の武士であることは、何らの疑いもないのであつた。

この一団が傍若無人に、それほど夜も更けていないのに、京都の町をざわめきながら、小走りに走つて行くのであつた。

調度掛にかけてある弓きゆう箭せんを眺め、しばらく小首を傾けてい
る、日置正次へきまさつぐの耳へ大勢の人声が、裏庭の方から聞こえてきたの
は、それから間もなくのことであつた。

（はてな？）と正次は耳を澄ました。大勢の人間が裏門を押し開
け、庭内へ入つて来たようであつた。

不意に呼びかける声が聞こえてきた。

「お約束の日限と刻限とがただ今到来いたしてござる。恩地雉四
郎お迎えに参つた。いぎ姫君お越し下され。お厭とあらば判官殿
手写の『養由基ようゆうき』をお譲り下されよ！」

濁みた兇暴の声であつた。

すると書院の次の間から、——すなわち一ノ間から老人の声が、

嘲笑うようにそれに答えた。

「雉四郎殿か、お迎えご苦労！　が、姫君には申して居られる、
迎えにも応ぜず『養由基』もやらぬと。……雉四郎殿お立帰りな
され」

「黙れ！」と、雉四郎の怒声が聞こえた。

「それでは約束に背くというものだ」

「元々貴殿より姫君に対して、強請された難題でござる。背いた
とて何の不義になろう」

「よろしい背け、がしかしだ、一旦思い込んだこの雉四郎、姫も
奪うぞ『養由基』も取る！　それだけの覚悟、ついて居ろうな！」
すると老人の声が書院の方へ——正次の方へ呼びかけた。

「あいや客人、日置正次殿、我等必死のお願いでござる、貴殿のゆんぜい弓勢お示し下され！ 寄せて参つたは、不頼の輩ともがら、あばら組と申すやつばら奴原、討ち取つて仔細無き奴原でござる！」

「応」と云うと日置正次は、調度掛にかけてある陽の弓、七尺五寸、むらしげどう叢重籐、その真中まんなかをムズと握り、しろみがきべらなりかぶら白磨篋鳴鏑の箭やを掴むと、襖をあけて縁へ出た。

「寄せて来られた方々に申す。拙者は旅の武士でござつて、今宵この館に宿を求めた者、従つて貴殿方に恩怨はござらぬ。又この館の人々とも、たいして恩も誼よしみもござらぬ。がしかながら見受けましたところ、貴殿方は大勢、しかのみならず、武器をたずさえて乱入された様子、しかるに館には婦人と老人、たった二人し

かまかりあらぬ。しかも二人に頼まれてござる。味方するよう頼まれてござる。拙者も武士頼まれた以上、不甲斐なく後へは引けませぬ。……そこで箭一本参らせる。引かれればよし引かれぬとなら、次々に箭を参らせる」

云い終わると箭^{やはす}箒を弦に宛て、グーツとばかり引き絞った。狙いは衆人の先頭に立ち、槍を突き立て足を踏みひらき、鹿角打った胃をいただいている、その一党の頭目らしい——すなわち恩地雉四郎の、その胃の前立であった。弦ヲ控^ヒクニ二法アリ、無名指ト中指ニテ大指ヲ压シ、指頭ヲ弦ノ直^{チヨクケン}堅^{コレ}に当ツ！ 之ヲ中国ノ射法ト謂^イフ！ 正次の射法はこれであった。満を持してしばらくもたせたが「曳^{えい}！」という矢声！ さながら裂帛！ 同時に驚

鳥の嘯くような、鏑の鳴音響き渡つたが、源三位頼政げんざんみよりまさぬえ鶴を射つや、鳴笛めいてき紫宸殿ししんでんに充つとある、それにも劣らぬ凄まじい鳴音が、数町に響いて空を切つた箭！ 見よおりから空にかかつた、遅い月に照らされて、見えていた恩地雉四郎の、鹿角の前立を中程から射切り、しかも箭勢せんせい弱らずに、遙かあなたに巡らされている、築土の塀に突き刺さつた。

ド、ド、ド、ド——ツという足音がして、この弓勢ゆんせいに胆を冷やした、あばら組三十五人は、一度に後へ退いた。が、さすがに雉四郎ばかりは、一党の頭目であつたので、逃げもせず立つたまま大音を上げた。

「やあ汝出過者め、無縁とあらば事を好まず、穏しく控えて居れ

ばよいに、このあばら組に楯衝いて、箭を射かけるとは命知らずめ、問答無益、出た杭は打ち、遮る雑草は刈取らねばならぬ！

さあ方々おかえりなされ！ 弓勢は確かに凄じくはござるが、狙いは未熟で恐るるところはござらぬ。冑の前立をかつかつ射落とし、眉間を外した技倆うでで知れる！」

すると正次は嘲るように云つた。

「雉四郎とやら愚千万、昔保二元ほうげんの合戦において、鎮西ちんぜい八郎た為めもよしとも

朝公、兄なる義朝よしとに弓は引いたが、兄なるが故に急所を避け、冑の星を射削りたる故事を、さてはご存知無いと見える。拙者先刻も申した通り、我と貴殿と恩怨ござらぬ、それゆえ故意わざと眉間を外し、前立の鹿角を射落としたのでござるぞ。それとも察せず

に只今の過言、狙いは未熟とは片腹痛し、おお可々よしよしご所望ならば、二ノ箭にてお命いただこう。……参るゾーツ」と背後うしろを振り返り、床の間にある調度掛の箭を、抜き取ろうとして手を延ばした。

5

途端に箭が一條眼の前へ出された。

「いざ、これで、遊ばしませ」

「うむ」と思わず声を上げ、その箭を取ったが眼を据えて見た。

その正次の眼の前に、——だから正次の背後横に、髪は垂髪、衣裳は緋綸子、白に菊水の模様を染めた、裯うちかけ襠かたを羽織った二十一

二の、臆ろうたけた美女が端坐ぼんざしていた。

「貴女きじよは？」と正次は驚きながら訊ねた。訊ねながらも油断無く、
 弦ゆみに矢筈やはすをパツチリと嵌め、脇構わきかまえに徐おもむろに弦を引いた。

「この家の主人あるじにござります。……」

「では先刻いまようの……今様の歌主？」

云い云い八分通り弦を引き、

「ご姓名は？ ……ご身分は？」

「楠氏の直統みつとら、光虎みつとらの妹しの、篠しのと申すが妾わらわにござります」

「おお楠氏の？ ……さては名家……その由緒ある篠姫様のが……」

ヒューツとその時数條の箭が、敵方よりこなたへ射かけられた。
 と、瞬間に正次の眼前、数尺の空で月光を刎ねて、宙に渦巻き光

る物があつた。

「おツ」——キリキリと弦を引き、さながら満月の形にしたが

「おツ」とばかりに声を洩らし、正次は光り物の主を見た。一人の老人が小薙刀を、宙に渦巻かせて箭を払い落とし、今や八双に構えていた。

「や、貴殿は？ ……」

「昼の程は失礼」

「うーむ、和田の翁でござるか」

「すなわち楠氏の一族にあたる和田新発意しんぱちの正しい後胤、和田兵ひ

ようご庫と申す者。……」

「しかも先刻築山の方より、拙者を目掛けて箭を射かけたる……」

「それとて貴殿の力倆如何にと、失礼ながら試みました次第……」

「……………」

矢声は掛けなかつた！ それだけに懸命！ 切つて放した正次の箭！ 悲鳴！ 中あたつた！ 足を空に、もんどり討つて倒れたのは、雉四郎の前に立ちふさがつた、敵ながらも健けなげ気の武士であつた。

ワーツとどよめき崩れ引く敵！ しかも遙かに逃げのびながら、またもハラハラと箭を射かけた。と薙刀を渦巻かせ、和田兵庫は正次の前方、書院の縁の端に坐り、片膝をムツクリと立てていた。

「いざ、三ノ箭！ 遊ばしませ」

姫が差し出した三本目の箭を、素早く受けると日置正次、矢筈

に弦を又もつがえ、グーツと引いて満を持した。

「その楠氏の姫君が、何故このような古館に？」

とういんさえものすけのぶたか

「洞院左衛門督信隆卿、妾の境遇をお憐れみ下され、長年の

間この館に、かくまいお育て下されました。しかるに大乱はじま

りまして、都は大半烏有に帰し、公卿方どうじょうびと堂上人かんだちめ上達部、い

ずれその日の生活たつきにも困り、縁をたよって九州方面の、大名豪族

の領地へ参り、生活くらしするようになりまして、わが洞院信隆卿にも、

過ぐる年周防すおうの大内家へ、下向されました。ござります。その際妾

にも参るようにと、懇ねんごろにおすすめ下されましたが……」

「……………」

矢声は掛けなかつた、充分に狙い、切つて放した正次の箭！

中^{あた}つて悲鳴、又も宙に、もんどり打つて仆れた敵！ ワーツとど

よめいて敵は引いたが、懲りずまた箭をハラハラと射かけた。

渦巻かせた兵庫の薙刀のために、箭は数條縁へ落ちた。

「四本目の箭、いざ遊ばせ！」

「うむ」と受け取り、そのままつがえ

「何故ご下向なされませなんだ」

「先祖正^{まさしげ}成より伝わりました、弓道の奥義書『養由基^{ようゆうき}』九州

あたりへ参りましたら、伝える者はよもあるまい、都にて名ある

武士に伝え、伝え終らば九州へと……」

「養由基？ ふうむ、名のみ聞いて、いまだ見たこともござらぬ

兵書！ ははあそれをお持ちでござるか」

云い云い正次は、キリ、キリ、キリ、キリ、と弦をおもむろに引きし
ぼった。

「養由基一卷拙者の手に入らば、日頃念願の本朝弓道の、中興の
事業も完成いたそうに。欲しゆうござるな！ 欲しゆうござるな。
……さてこの度は何奴を！」

満月に引いてグツと睨んだ。

6

自分の部下を目前において、二人まで射倒された雉四郎は、怒
りで思慮を失ってしまった。箭に対して刀を構えようとはせず、
持っていた槍を引きそばめ、衆の先頭へ走り出た。

「やあ汝おのれよくもよくも、我等の味方を箭先にかけて、二人までも射て取つたな。もはや許さぬ、槍を喰らつて、この世をおさらば、往生遂げろ！」

叫びながらまつしぐら 驀進まっしぐら に、正次目掛けて走りかかった。

(いよいよ此奴こやつを！) と日置正次、引きしぼり保つた十三束三ぞくみつ 伏ふせ、柳葉やなぎはの箭先に胸板を狙い、やや間近過ぎると思ひながらも、兵ひょうふつとばかり切つて放した。

狙いあやまたず胸板を射抜き、本もと矧はぎまでも貫いた。

末期の悲鳴、凄く残し、槍を落とすとドツと背後へ、雉四郎は仆れて死んだ。頭目を討たれたあばら組の余衆、競つてかかる勇氣はなく、雉四郎の死骸さえ打ち捨て、ドーツと裏門からなだれ

出た。

半刻^{ほんとき}あまりも経った頃、正次と篠姫と和田兵庫とが、書院でつつましく話していた。正次の前には三宝に載せた「養由基」の一卷があつた。姫から正次へ譲られたものである。「養由基」を譲るに足るような武士を、この館へ幾人となく誘い、弓道をこれまで試みたが、今日までふさわしい人物に逢わず、失望を重ねていたところ、今日になって貴殿とお逢いすることが出来た。「養由基」をお譲りする人物に、うってつけに似つかわしい立派な貴殿に。——こういう意味の事を和田兵庫は云つた。

「恩地雉四郎と申す男、決して妾^{わらわ}の一族では是^{これな}無く、赤松家の不

頼の浪人であり、以前から妾に想いを懸け、『養由基』ともども奪い取ろうと、無礼にも心掛けて居りました悪漢、それをお討ち取り下されましたこと、有難きしあわせにござります。今日まで彼の要望を延ばし、切刃詰まった今日になって、貴郎様あなたに討つていただきましたことも、ご縁があつたからでござりましょう」

「こういう意味のことを篠姫も云つて、助けられたことを喜んだ。今後のご起居いかがなされますか？」

「こう正次は心配そうに訊いた。」

「実は明日大内家より、迎いの人数参りますことに、とり定めある儀にござります。その人数に連れられまして、九州へ妾下向いたします。雉四郎の難題を今日まで、引き延ばして居りましたの

もそれがためで、さらに今日一日を引き延ばし、明日になった時難を避け、立ち去る所存でござりました」

こう篠姫は微笑しながら云った。

「きわどい所でござりましたな、私も日中和田兵庫殿に、お目にかかる事出来ませなんだならば『養由基』のお譲りを受けるといふ、またとある可くもない幸運に、外れるところでござりました」

「ご縁があつたからでござります」

鶏とりが啼いて明星が消え、朝がすがすがしく訪れて来た時、美々びびしく着飾った武士達が多勢、立派な輿を二挺舁ぎ、この館を訪れた。大内家からの迎えであつた。

「おさらば」「ご無事で」と別離の挨拶！

挨拶を交わせて名残惜しそうに篠姫とそうして和田兵庫とは、日置正次と立ち別れた。楠氏の正統篠姫は、翠華漾々平和の国、周防大内家へ行つたのである。

淮南子えなんじ二曰ク「養由基ヨウユウキ楊葉ヨウヨウヲ射ル、百発百中、楚ソノ恭王キョウオウ

狝シテ白猿ヲ見ル、樹ヲ遶メグツテ箭ヤヲ避ク、王、由基ニ命ジ之ヲ射シム、由基始メ弓ヲ調べ矢ヲ矯タム、猿乃チ樹ヲ抱スナワイテ号サケブ」

それ程までに秀でた漢土弓道の大家、その養由基の射法の極意を、完全に記した『養由基』一卷、手写した人は大楠公であつた。その養由基を譲り受けて以来、日置弾正正次へきだんじょうまさつぐは、故郷に帰つて研鑽百練、日置流の一派を編み出した。これを本朝弓道の中祖、

斯界の人々仰がぬ者なく、日置流より出て吉田流あり、竹林派、
雪荷派せつか、出雲派いづもあり、下つて左近右衛門派さこんえもんあり、大蔵派おおくら、印いんざ
西派い、ことごとく日置流より出て居るといふ。

青空文庫情報

底本：「国枝史郎伝奇全集 卷五」未知谷

1993（平成5）年7月20日初版発行

初出：「キング」

1932（昭和7）年6月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：阿和泉拓

校正：湯地光弘

2005年5月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

弓道中祖伝

国枝史郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>